昭和二十五年

正月

初日光凍て水神の注連飾

明けしらむ農家の灯初霞

鳴禽に老の初山日和えし

大枯木伐り一塊の冬日あり

寒ゆるむ土にとどろく蓆機（ムシロバタ）

剪定す影浅春の地にふるう

産雞の高ねをきほい雪解午后

布巾干す垣に禽かげ二月晴

草におく薄暮の野良着蟻あそぶ

寝しづまる軒の花棕梠月高し

峡北増富

かっこうや羊歯原ひかるはこび雨

花林檎端（ミズ）の夕つづひややかに

吾が生家の幼時を偲びて

あんづおつ窓の薄明あけ易き

白南風や雲ふれそよぐ青芒

柾咲く垣の夕照り梅雨上る

夏に入る大雨流るる樹幹かな

茶殻火の余燼に暮天雨となる

すくも火のくすぶり着莫座雨とおる

坂井遺跡保存庫上棟

金の夕陽幣涼しき天狗棚

谷戸道喜院に遊び帰途大雷雨に逢ふ

龕(ヅシ)に灯を入れて百姓喜雨の餉に

雲生まれて高みつ消えつ萱(カヤ)は穂に

晩夏光ポプラの喬木風生める

七夕を流す童心雲遠く

街騒はいまだし蓮田朝曇り

要害山の麓積翠寺温泉にて句会

昼顔に蛇取りひそと跗みいる

玉蟲の越ゆる草炎ひそかなる

灯篭の灯影さだまる箒草

濡れ髪を梳きあう童女涼しき瞳

暑休はや芙蓉うかがう大揚羽

桑海の風はしろがね盆の月

糟糠の髪匂はする門火かな

良知病む二句

痩せて眸(メ)の蒼し蜩(ヒグラシ)ききすます

類杖に何をみつむる晩夏光

盆の月更け摶ちかえす桑嵐

蚯蚓出ず土の冷く鰯雲

蚕飼妻まどろみ浅き九月蛔(カヤ)

夜蟬鳴き月穢の妻が水使う

厠の灯ながるる雨の秋海棠

秋冷や水の金星明瞭かに

信濃も北辺の下高井郡赤岩郷へ遊ぶ

あおくと千曲は北へ林檎熟る

噛み捨てる草の葉粗し鰯雲

民生委員として援護家庭訪問

秋西日見らるるたつきあからさま

秋はしづか溺るる蜂は溺るるのみ

鰯雲燈台守は茶圃に在り

颱風はそれ花紫蘇は暾(ヒ)に濡るる

莨あまし朝寒の燠美しく

透ける雲うすら氷めきて後の月

稲を刈る午天微塵もとどめざる

秋耕や雲の美しきを妻にいう

田神帰る冬の彼方に嶽沈む

蔓の実の曇(クモ)る瑠璃色草枯れぬ

草枯れて通う湧水日々ぬくく

短日の局の人混み訃報打つ

稲をこくエンジンの湯気暮れて濃し

青柳句会応募入選句五句

冬構え柚子蒼天を輝かす

揚羽うき高く空しき空の藍

冬構え尖る山貌したしめず

蜂愉し揺れゆるやかに菊車

菊籬日輪海をゆく孤高

破れ蓮眩(メクラ)む雲は高からぬ